



TITLE:

# パネル及び各発表者に対するコメント

AUTHOR(S):

浅野, 淳博

---

CITATION:

浅野, 淳博. パネル及び各発表者に対するコメント. アジア・キリスト教・多元性 2010, 8: 51-54

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/108428>

RIGHT:

## パネル及び各発表者に対するコメント

浅野 淳博

### 1. 狭間氏

- a. 新渡戸の「義」（と後の「義理」）に関する議論は、出典にもあるようにマタイ福音書的な「正しい行い」としての義が中心となっているようである。「『義』はキリスト教においてとりわけ重要な基本概念」ではあるが、パウロ的な「（キリストの贖いゆえに）神との正しい関係がある」という神に向かった視点は本来的に武士道の議論には本来相応しくないであろう。
- b. 「殉死」と「殉教」の差異に関する議論について、海老沢と新渡戸のあいだに齟齬があることは分かるが、時代的に殉教文書が新渡戸の教える「武士道」を反映していたかという問題が残る。
- c. 武士の忠義に関して赤穂浪士の例を挙げ、その討ち入りが「心情や対面、意地」という動機であろうとの意見に関して、『丸血留之道』において「コロビ」が悪である理由の1つに、「コロビ」が当事者と教会の面目に関わることを挙げているのは興味深い。またイグナティウスによる『ローマ書簡』には、執拗な死への願望がすでにうかがわれ、この傾向が後2世紀後半以降さらに醸成される。したがって、キリスト教殉教精神の純粹性に関しての再評価が必要と考えられる。

### 2. 方氏

- a. 『聖教要旨』からも分かるように、カトリックは儒教という文化・思想背景を積極的に用い、「ハングル聖書」から分かるように、プロテスタントは民衆の言語を積極的に用いた、とまとめることができようが、プロテスタントの宣教に対してカトリックの文脈化が貢献したであろうか。そして、『聖教要旨』において儒教はいかに取り込まれたのだろうか。
- b. 韓国における宣教が、積極的・能動的受容であったとの結論だが、消極的・受動的受容（植民地的受容？）には、その過程ではなく文化変容という意味においてはどれほど違いがあるだろうか。コメンテーターが興味を抱く「文化抵抗と聖書受容」においては、後者における受容におけるエネルギーを見逃したくない。

3. 岩野氏

- a. 内村にしても新渡戸にしても、「義 (righteousness)」を「忠義 (royalty)」という派生的概念として武士道と関連づけているようである。塚本の「愛」を武士道と対比させ「町人的」と述べていることから分かる。なぜなら本来「義」と「愛」は対立的ではなく、補完的だからであるはずだからである。
- b. 『武士道』が特別な『日本らしさ』、『日本の固有性』といったことにこだわったものではない」という結論に関して、コメンテーターはどうしても対西洋的なレトリックが見え隠れするように考える。『武士道と基督教』においても、「キリスト教を煩わすの必要はない」という表現にさえ、「日本は西洋と異なり十分に立派である」というニュアンスがうかがわれる。もっともそれが、厳密な二元論ではなく、「東洋的な絶対化とは異なる」という点は、これを認める。ここにはおそらく、太田雄三が言うところの「内村のアンビバレンス」が影響しているであろう。
- c. 『武士道と基督教』内「武士道は日本人の道であります。之を日本道德と称して ...」が示唆するように、内村にとって「武士道」は理想的日本を印象づける表象ではなかろうか。ただ太田雄三が「何を言っているのか分からない」という場合、その不満は、本来曖昧な「理想的日本」をやはり曖昧な「武士道」という表象をもって表そうとするからであろう。たとえば、エフェソ 6 章 10-17 節で信仰的熟成の教えに「神の武具」という非常に具体的な表象を用いることと、「武士道」という表象は性格的に多に異なる。

4. 東馬場氏

- a. スミスの比較論に関して、釈義学上の視点からは、「比較における類似と差異は所与のものでなく」というのみならず、比較自体が一对一の対比ではない「意味領域 (sphere of meaning) の重なり」をはかるものであり、これはサイエンスであると同時にアートでもある。アートであるから想像力を発揮した創造であろう。「意味の領域の重なり」を手探りする作業であるから、解釈者による重なり具合の理解から、西洋風武士道、基督教的武士道等が生じよう。英語から日本語への翻訳はこの過程を複雑化させよう。
- b. 「歴史的武士道」に関して、歴史的に「武士」がいたことは示せようが、「武士道」となると「歴史的」という形容詞に違和感を禁じ得ない。「武士道」とは A. Cohen が言うところの「表象的アイデンティティ (symbolic identity)」であって、その曖昧さゆえに、それが集団を規定するというよりも、異なる人々がそれに微妙に異なる意味をもって集まるシンボルではなかろうか。シンボルは何かを指すが、多くによって形づくられる厄介な道具でもあるから、「武士道」の議論も厄介な作業とならざるを得ない。

## 「丸血留之道とポリュカルポス殉教物語の『イメージ』」

### 導入

これはアジアにおける聖書受容史、とくに「文化と抵抗」という主題を主眼に置いた受容史研究プロジェクトの一貫である<sup>1</sup>。本論文においては、キリシタン文書の中でも殉教文書というある意味での「抵抗文書」を、初代キリスト教における使徒教父文書中の殉教文書と類例的な比較をとおして、その聖書受容を理解する試みである。

### A. 『丸血留之道』の概説

『丸血留之道』は『マルチリヨの栞』という3部構成の殉教文書の一部であり、この書全体は、長崎の浦上における潜伏共同体のあいだで保存されていた文書で、1789-1800年のあいだに発見されたものである<sup>2</sup>。執筆年代は16世紀終盤から17世紀初頭、あるいは1640年代頃と推定される<sup>3</sup>。『マルチリヨの栞』の構成は以下の通りである。1) マルチリヨの勧め：殉教に関する一般的な教え(=『丸血留之道』)、2) マルチリヨの心得：殉教の備え、3) マルチリヨの鏡：3人の女性の殉教物語。

『丸血留之道』は三部構成で各二項からなる。以下がその概容である。第1部は、なぜデウスが迫害を許すのかという問いに対して、迫害が信仰墮落に対する特効薬であると述べる。また、なぜデウスが迫害者を野放しにするかという問いに対して、デウスの忍耐を強調するとともに、繰り返し迫害者の存在が信仰を支えると教える。第2部では、「コロビ」の運命が「ゼンチヨ(異邦人)」よりも悲惨であることを述べ、侍さえ主人に仕えるならば、天の報いを与えるデウスに仕えることは当然であると教える。そして、他者のために命を賭したイエスがマルチルの位を得た姿に倣うよう促す。第3部は、艱難の末にマルチルの位を得た聖書中の人物を挙げ、マルチルとなることの幸いを説く。そしてマルチルとなるべき道徳的心備えを列挙する。

### B. イメージ創出のための『ポリュカルポス』のインクルーシオと『丸血留之道』の御パッション

『ポリュカルポス殉教物語』(155-60CE)は「福音(書)」、「模倣」という主題によるインクルーシオ(1.1-2 / 19.1)が物語全体を包み、具体的な福音書引用はないが、読者は福音書の「オーラ」によってキリストの受難とポリュカルポスの物語を重ね合わせ、中心的な主題である受難の心備えへと促される。『丸血留之道』に目を向けると、マルコを除く福音書の引用が他のすべての引用を併せた以上に頻出し、殉教に天的視点を与えている。しかし興味深いことに、ゲッセマネの祈りへの言及(『丸血留』3.6<sup>4</sup>)を除いて、イエス受難物語が引用されることはない。それでも『丸血留』は「(イエズスの)御パッショ

ン」という表現を 10 回にわたって用い、読者がそれを感謝し、読者自身が殉教者となる道備えの動機としている (1.2, 3, 2.4, 3.6, 4.2, 5.4, 6.6, 6.9)。本書においてはイエスの受難が中心的主題であり、読者は「御パッション」という言葉が映し出す鮮明なイメージによって、その内容に倣う道を選ぶ。『ポリュカルポス』も『丸血留』も、文学的效果には違いがあるが、読者がイエスの受難というイメージを通して、殉教の心ぞなえをするよう配慮されていると考えられる。

この大きな物語としての「御パッション」の中で、今回の主題である武士道（ここでは「侍」）への言及も 1 つの文学的手法と思われる。「コロビ」の是非に関する件では、侍が得る知行と天の報いとの比較（『丸血留』3.3）、主従関係の困難に関する言及が見られる (3.6)。ここに武士的観念（名誉・忠義）が殉教思想を刺激する様子を読み取ることができるとは不明である<sup>5</sup>。頻度は異なるが農業や漁業も例として用いられている (1.6, 3.15)。地上における多くの報いや生死との直面という意味では、「侍」がより鮮明なイメージとして選ばれたと理解できようが、その精神論を『丸血留』の内に読み取ることに関しては慎重にならざるを得ない。たとえばイグナティウスがポリュカルポスに宛てた『ポリュカルポス書簡』は、教会監督の理想的資質を強調しようとして競技者の競技に対する姿勢を例として持ち出すが (1.2, 3, 2.3, 3.1)、これらはローマ人が一般に徳として称賛する資質を印象づける目的で用いられており、当事者たちが競技者であったとか、競技者精神が教会運営に多大な刺激を与えていたとは一般に考えられない<sup>6</sup>。『丸血留』における「侍」への言及も、忍耐等の概念を印象づけるための有用な表象として選ばれた、という理解に留めるべきではなかろうか。

（あさの・あつひろ 関西学院大学神学部准教授）

1 企画者はこれを、Christopher Rowland, *Radical Christianity: A Reading of Recovery* (London: Polity, 1988) のアジア版に相当すると考える。

2 尾原悟著『きりしたんの殉教と潜伏』キリシタン文学双書、教文館、2006 年、277 頁。

3 姉崎正治著『切支丹宗門の迫害と潜伏』同文館、1925 年、138 頁。海老沢有道他著『キリシタン書・排耶書』岩波書店、1970 年、624 頁。

4 『丸血留之道』の章句数字は前掲の『キリシタン書・排耶書』、236-60 頁に発表者が便宜上、段落ごとに付したものである。

5 海老沢有道著『キリシタンの弾圧と抵抗』雄山閣出版、1981 年、97-100 頁を参照。

6 William R. Schoedel, *Ignatius of Antioch* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1985), p. 261. 競技者と殉教者の比較は 1 クレメンス 5.1-2, 4 マカバイ 6.10, 17.15-16 を参照。